

2023(令和5)年12月21日報道発表資料
[本リリース発信元]ロームシアター京都(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)



オル太『ニッポン・イデオロギー』

ニッポンのイデオロギーは永久に不滅なのか？

注目のアーティスト集団“オル太”
全6章の超大作を上演！

2024年1月13日(土)、14日(日)

ロームシアター京都 ノースホール

[本リリース発信元]

ロームシアター京都(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団) 広報担当:加藤(陸)、儀三武、山形
電話:075-771-6051(10:00~17:00) FAX:075-746-3366 E-mail:press@rohmtheatrekkyoto.jp

ロームシアター京都では2024年1月13日(土)、1月14日(日)にオル太『ニッポン・イデオロギー』を開催いたします。2020年にロームシアター京都×京都芸術センター U35 創造支援プログラム“KIPPU”で『超衆芸術スタンドプレー』を発表し賛否両論を巻き起こしたアーティスト集団「オル太」が、多彩なゲストパフォーマーと共に、「ニッポンのイデオロギー」がとる日常的形態のパフォーマティブな分析に取り組みます。横浜国際舞台芸術ミーティング(YPAM)とロームシアター京都の共同制作です。各界の目利きからも熱い注目を集める(P.3~4にコメント・コラム掲載)オル太最新作をお見逃しなく。

■ 作品について

ニッポンのイデオロギーは永久に不滅なのか？



撮影：前澤秀登

ヴィジュアルアーツ／パフォーミングアーツの制度との折衝、社会学的／民俗学的フィールドワークを重ね、挑発性とユーモアを併せ持つ活動を展開するアーティスト集団「オル太」が、「ニッポンのイデオロギー」がとる日常的形態のパフォーマティブな分析に6つの切り口で取り組み、章立てしました。

取り止めのない一つの感情のようなものが、現在の日本の生活を支配しているように見える[...]日本に限らず現在の社会に於けるこの切実で愚劣な大きな悲喜劇のト書きを暴露するのは、吾々にとって、極めてつまらない併し又極めて重大な義務にもなるのだ(戸坂潤『日本イデオロギー論』、1935年)。

その「つまらな」さを「面白い」パフォーマンスに変容させるか、あるいは「日本イデオロギイから脱却した」と思いこんでいる人の足をひっぱって、おせっかいにも引きもどす(竹内好『日本イデオロギイ』、1952年)のか

オル太の最新作『ニッポン・イデオロギー』京都公演では全6章をA・Bプログラムに分けて上演します。

A プログラム

- 第1章 Dream の意義
- 第2章 Gestell の解放
- 第3章 Death の権利

B プログラム

- 第4章 Calm の獲得
- 第5章 Voice の反乱
- 第6章 Ideology の真相

■公演前コメントをいただきました！ < [公演ページ](#)・各種 SNS にて追加公開予定 >

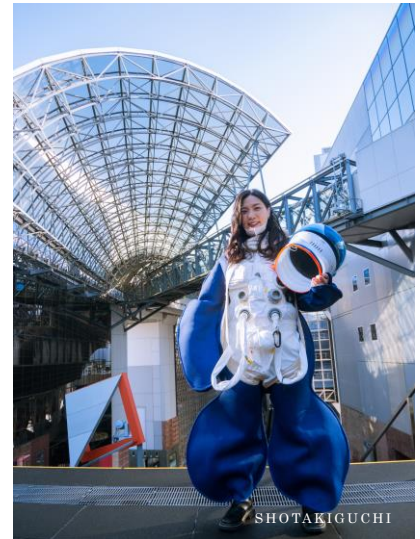
南野詩恵(劇作家、演出家、衣裳作家、舞台芸術団体「お寿司」主宰)

2019年度のロームシアター京都×京都芸術センター U35 創造支援プログラム“KIPPU”に選出されたのが、「オル太」と「お寿司」でした。

我々は数ある応募者の中から、この幸運を手にし、かつてない規模感の舞台へ片道切符で一步踏み出したことを思い出します。

オル太の作品の芯には怒りに似た炎が煌めいているように感じます。華やかな活躍の何処にあってもいつも大量の手仕事があり、常にその手で物をさわっている作家は信用ができます。大掛かりな舞台美術の創作と莫大な情報の整理を一向に諦める様子は無く、それら全てを自ら背負って立つのです。

オル太の 6 章からなるこの超大作をロームシアター京都 ノースホールという場で鑑賞できることが本当に楽しみです。



タカハシ'タカカーン'セイジ(アーティスト、介護福祉士)

彼らの不思議さは、もはや家族みたいだなあという関係性があるって、絶妙に長くは話し合わずに、どんどんと物事に取り組んでいるところ。実際はたくさんミーティングをしているんだろうけど、以前京都で作品をつくって発表したときはそうでした。穏やかだったり、時にはピリッと一触即発するかもという場面があったり。

それら劇場作品を、たとえるならどんな言葉があるかなと考えを巡らせていたら「動かない展覧会」がイメージに合うかなと思っています。2020年のロームシアター京都公演に参加して、その後コロナ禍に行われた神戸での公演を観た印象にはなるので、最近がまたどうなっているのか、楽しみなところですよ。

だいたい展覧会は、鑑賞者が次々に作品が飾られている部屋を移動するものだけれど、オル太の場合は観客は椅子に固定され、展覧会場がその場でゆっくりと作り変えられていく様子を観て／観せられているようだと感じます。人々が働くところを見学させてもらっている感じがよくには新鮮で、上演時間が2時間を超えていてもぜんぜん退屈しません。

それと、ぼくが苦手だと思う「日本で暮らしていてふだんこういう風に感情表現しないだろう」というとでもくさくて、うるさい演技がオル太にはないこと、これも大きな魅力です。感情表現そのものを否定しているのではなく、わざとらしさ、大げさなものが苦手なのです。

まだまだ挙げられそうだし、ぼくが彼らの魅力を書かなくても、気にしている人は多そうだからふつうに観にくると思うけどなあと思いつつも、、、こうやってコメントを残せること光栄に感じています。

くれぐれも体調に気をつけてもらえたらと思っています。そして、この公演でまた何かを掴んで、さらなる展開がうまれることを祈っています。



山本卓卓(劇作家、演出家、劇団「範宙遊泳」主宰)

オル太はカッコいい。オル太はかわいい。オル太は知性が高い。
オル太はオシャレ。オル太はドヤらない。オル太は見下さない。オル太は手を抜かない。オル太は誠心誠意。オル太は文脈。オル太は過剰。
オル太は飄々。オル太は笑顔。オル太はカウンター。オル太は見立て。
オル太は敵視しない。オル太は冷たい。オル太は優しい。オル太は人間。オル太は演劇。オル太は身体。オル太は現代美術。オル太はそれ以外。かように、オル太は私の憧れがいっぱい詰まっている集団です。



撮影：雨宮透貴

吉岡恵美子(キュレーター)

YPAM ディレクションとしてオル太が BankART Station で発表した全 6 章から成る『ニッポン・イデオロギー』を 2 日間かけて観た。トータルで 6 時間超えという、異例の長時間公演だが、関西の皆さん、大丈夫。京都公演は偶然にも大学入学共通テストと同じ日程。受験生たちのように平常心で臨めば『ニッポン・イデオロギー』がちゃんと持っていつてくれる(1 科目受験ならぬ 1 プログラム鑑賞も可)。終戦の詔書からディズニーランド、源氏物語から AI、こんにやくダイエットから風船爆弾まで。オル太の研究の成果と彼らの直感的跳躍力が、日常の中の暴力構造を、麻痺してきた私たちの観念の歪さを浮かび上がらせる。鏡に写るあなた自身かもしれない亡霊に会いにいこう。



■関連テキスト

オル太についての紹介コラムやロームシアター京都×京都芸術センターU35 創造支援プログラム“KIPPU”にて上演されたオル太『超衆芸術 スタンドプレー』(2020年上演)の劇評を当館 WEB マガジン「Spin-Off」に掲載しています。

○オル太のこと

文: 林立騎(翻訳者、演劇研究者、那覇文化芸術劇場なはーと企画制作グループ長)

https://rohmtheatreyoto.jp/archives/column_olta_hayashi/

○グッドラックと偶然が交差する都市のスタンドプレーヤーたち-オル太『超衆芸術 スタンドプレー』

文: 能勢陽子(豊田市美術館学芸員)

https://rohmtheatreyoto.jp/archives/oruta_nose/

○「円環・回転・ループ」が支配する醒めた熱狂空間で、「スペクタクルに耐えない身体」を提示する

文: 高嶋慈(美術・舞台芸術批評)

https://rohmtheatreyoto.jp/archives/oruta_takashima/

■プロフィール

オル太 OLTA

2009年に結成したアーティスト集団。メンバーは、井上徹、斉藤隆文、長谷川義朗、メグ忍者、Jang-Chi。集団的な行為とそこで繰り広げられるコミュニケーションに着目し、絵画、パフォーマンス、ビデオなど様々な形式で作品を発表する。主な公演は、YPAM ディレクション(2021年、2022年)、ロームシアター京都(京都芸術センターU35 創造支援プログラム“KIPPU”,2020年)、Lilith Performance Studio(スウェーデン、2015年)、ソウル・マージナル・シアター・フェスティバル(韓国、2014年)など。参加した主な展覧会は、青森県立美術館(2019年)、釜山ビエンナーレ(2016年)、金沢21世紀美術館(2014年)など。第14回岡本太郎賞受賞。



■公演情報

オル太『ニッポン・イデオロギー』

日時:2024年1月13日(土)、1月14日(日)

1月13日(土)

A プログラム 13:00 開演

B プログラム 18:00 開演

1月14日(日)

A プログラム 12:00 開演★

B プログラム 17:00 開演★

★託児サービスあり

受付開始:各回開演 45 分前

開場:各回開演 30 分前

会場:ノースホール

上演時間:各プログラム約 3 時間 30 分(休憩含む)

委嘱・製作:横浜国際舞台芸術ミーティング

共同製作:ロームシアター京都

リサーチ協力:YCAM InterLub 協力:山口情報芸術センター[YCAM]

主催:ロームシアター京都(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)、京都市、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会

助成:文化庁文化芸術振興費補助金(統括団体による文化芸術需要回復・地域活性化事業(アートキャラバン2)) |

独立行政法人日本芸術文化振興会

事業名:JAPAN LIVE YELL project



撮影:前澤秀登

■チケット情報 [好評発売中]

料金:<全席自由>

A・B プログラム通し券(前売り販売/一般のみ)

一般 4,200 円

A プログラム、B プログラム のみの場合

一般 3,000 円、ユース(25 歳以下)1,500 円

※未就学児入場不可

※ユース(25歳以下)チケットは、公演当日に受付にて年齢が確認できる証明書(学生証、免許書等)をご提示ください。

チケット取扱:

・オンラインチケット 24時間購入可 ※要事前登録(無料)

<https://www.s2.e-get.jp/kyoto/pt/>

・ロームシアター京都チケットカウンター

[窓口・電話 TEL.075-746-3201(10:00～17:00、年中無休 ※臨時休館日等により変更の場合あり)]

・京都コンサートホールチケットカウンター

[窓口・電話 TEL.075-711-3231(10:00～17:00、第1・3月曜休 ※祝日の場合は翌日)]

お問合せ:ロームシアター京都チケットカウンター TEL.075-746-3201

公演 WEB ページ: <https://rohmtheatreyoto.jp/event/108622/>

[本リリース発信元]

ロームシアター京都(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団) 広報担当:加藤(陸)、儀三武、山形
電話:075-771-6051(10:00～17:00) FAX:075-746-3366 E-mail:press@rohmtheatreyoto.jp